

特集 宮澤名誉会長と星槎と私

宮澤保夫名誉会長と私のリスタート

佐藤 尚正

峠の一コマ

宮澤名誉会長の訃報を聞いて、空虚感を感じると同時に、頭に浮かんだ場面があった。旭川から国道12号線を経由して、芦別に向かうなだらかな丘陵地帯に新城峠がある。胃がんの全摘手術前、平成20年11月下旬のことである。例年より早めの積雪があり、季節のうつろいを強く感じた年でもあった。名誉会長と気心の知れた福島修史氏（現芦別市教育長）の迎えて、来芦の道すがら峠の駐車スペースに立ち寄ったところであった。少年のような嬉々とした表情で、新雪の雪原に思い切り身を投げ出し戯れていた。その場に私が通りがかったものである。そのしぐさと表情に、一瞬感傷的になったことを思い出す。手術前の大きなプレッシャーにもかかわらず、星槎国際高等学校開校準備の実務推進者であり、苦楽を共にした福島氏との、気がおけないお付き合いの一コマを垣間見たものである。人との触れ合い、関わりを大切にしてきた名誉会長が、時間を作り、星槎の原点に近い芦別市を訪れたのも十分うかがえる。

芦別市には事あるごとに訪れ、「ヤッチャン」「マーちゃん」と呼び合う開校準備以来の盟友、故林政志市長や市の職員、地域の方々、子供たちや教職員との交流を深めていたわけである。また星槎の理解者など、各種各層のお客様をお連れしていた。集中スクーリングの時にも教職員や子供たちの動きを見て、アドバイスやサポートをしていたこともあった。

星槎と芦別市の難題

前年の平成19年4月、将来を見据え、芦別市における星槎の教育機能が拡充され、緑泉町にある本部校舎のほか、北海道版構造改革、地区再生特区（チャレンジパートナー特区）の認定を受けた「星槎総合教育研究所」が、旧北海道芦別総合技術高校に開設された。この施設には、星槎国際芦別スクーリング会場（実習場）も併設されることになった。ちなみに所長は星槎大学の副学長である。もともと星槎総合研究所は、星槎側から平成16年10月に、生涯学習・特別支援の推進を図るため、閉校予定の旧総技高を活用したいという要請があったものである。

この教育特区の事業内容としては、①星槎ウィークの開催 ②星槎大学の公開講座 ③市民ボランティア講師の勉強会の開催 ④ボランティア講師による生涯学習講座の開催等々があげられ、これには星槎大学が中心的な役割を担うことになっていた。平成19年から21年

の3年間の継続実施を基本としたものである。

折同じく頼城校舎の老朽化に伴い、早急に旧総技高への本部校移転を考えなければならない時期と重なっていた。この星槎総合教育研究所への移転併設については、北海道から「問題なし」と理解されていたが、旧総技高の土地・建物について星槎側の最終着地は、道からの無償譲渡を前提としていた。

しかし、芦別市と道との折衝は遅々として進展せず、芦別市としてもかなりの踏ん張りが期待される場所であった。平成20年2月には、芦別市による「旧総合技術高校施設に係わる無償貸付期間終了後の対応方針」について、①北海道から学校法人に対する無償譲渡 ②芦別市が普通財産として北海道から譲与を受け、芦別市が学校法人国際学園に譲与 ③北海道から学校法人に無償貸与（内部改修を容認）、のいずれかを解決策としていた。

芦別市としては、当初から有償譲渡は協議のテーブルに乗せられないことを明言していた。道教委としても、これまで芦別市との協議を踏まえ、この手法は現実的でないと理解を示していたが、知事部局（財政課、管財課）から強い指示を受けており、交渉はかなり行き詰まっていた。

無償譲渡（結果的には土地代金のみ有償譲渡となる）として引き継ぐためには、北海道との交渉で地元芦別市の絶大な理解と支援・協力が必要となる。そのため、特区事業と並行して、あらためて星槎と芦別市で基本的なスタンスを確認する必要があった。地元のホテルの一室で、芦別市側は林市長を含め三人の方、星槎からは名誉会長と井上一氏、そして私の三人で話し合いを持った。

席上、道との交渉が遅滞している状況を見て、現状の把握と以後の見通しが話された。名誉会長からは、林市長に対して語調の強い言葉が何度か発せられたものである。もちろん目的に向かう意識は互いに尊重しており、紆余曲折はあるものの盟友としての信頼関係を損なうような感情移入とまでは至らない。しかしながら重たい雰囲気が漂っていたのは事実である。星槎としての強い構えを申し述べるにとどまった。

名誉会長は、グループの総帥として私たちに対して時には険しく、厳しい言葉で呼びかけることもある。しかし一見ラフな所作の中にも、実に繊細な優しさを兼ね備えた方でもある。

物別れ的な話し合いの後、旭川空港までお二人を送ることになったが、名誉会長は強いやりとりの心理的な圧迫もあり、車中では打ち沈んだ様子が伝わってきた。途中、旭川市から物件紹介のあった旧第三中学校の校舎見学に立ち寄ったが、車から降りることもなく、井上氏と二人で向かったわけである。名誉会長は、一見豪胆な反面、もともと気配り上手で人間味のある優しさにあふれた方である。本音のお付き合いの中で、多くの悩みや葛藤をも経験していただろうと思われる。

星槎との出会い

平成14年12月、旭川市内のホテルレストランで、初代校長 跡部敏之先生とお会いしたのが星槎との最初の出会いである。教育界における星槎の思想性・存在感、加えて「ふしぎ

発見、未知への挑戦」を生徒像として、子供たちを真ん中に置く教育課程の編成、総合学習への取組み、変容を見守る教育観などを熱く丁寧に説明いただいた。懐が深く理路整然とした説得力があり、教育に対する毅然としたお考えが強く印象に残った。

翌平成15年1月、跡部先生を介して宮澤名誉会長との最初の出会いは、実に鮮烈な思い出となっている。当時、名誉会長は3泊4日の集中スクーリング中であり、生徒に対し教職員と一緒に、せわしく昼食準備をしておられた。その場に訪ねて行ったわけで、名誉会長にとってはよくある風景である。とにかく子供たちと直接関わることを自ら示し、活気に満ちた雰囲気調理実習をしていた。それまでの経験から、およそ教育関係の方とは思えない服装で、ジーパンに丸首セーター、腰には日本手ぬぐいである。言動は歯切れよくパワフル、これまでにない存在感は、初対面でも大きな魅力とインパクトがあったことは忘れられない。落ち着いて座ったのはわずか5・6分、これで十分であったと記憶している。

それまでの私は、概して教育に僅かでも長けているようでありながら、実際は、肝心の本質が抜けているような生徒観を持つ学校や教職員が多くなってきていた事実を感じていた。名誉会長や教職員、子供たちの様子を見て、星槎で実践されている「三つの約束」による心を学び、心の豊かさを持ち合わせることの教育の徳を見出した気がしたものである。

共に生きることの教え

お忙しい名誉会長であったが、何度か膝を交えてお話ししたことがある。特に大手術前の平成20年9月、みかん山で、星槎の教育像、事業展開や人材育成について話されたが、とりわけ教育現場のスタンスで私の大きな力となっていた。経営者の顔よりも必要とされる教育環境を創りあげる立場からの熱がこもった内容であった。「教育は心で接するもの」「学校は思想伝達の間」「だからこそ思想には行動が伴うもの」つまり子供たちにとって、一番行動しやすい環境づくりが大きな学びの間となることを話されていた。また、好奇心旺盛な方で、いろいろな情報を得ようともしていた。のちのちご本人から直接聞いたお話のだが、夢中になったこの夜、胃痛に悩まされたとのこと、すっかり恐縮してしまった。名誉会長とは、何かしら目に見えない絆で自分の人生と大いに繋がっており、これまでの触れ合いが実に心強く感じられるようになってきていた。

星槎は、「共に生き、共に育む」仲間づくりを原点として、共生社会に必要な人間性を培う「心の耕作」を求めている。常々「星槎の心」―「三つの約束」に象徴される確信的な理念を共に堅持していくことの大切さをお話しされていた。星槎人として慣れ親しんでいる「三つの約束」は、経営全体にその俯瞰と実践が中核となる。普段から、互いに個性を認め合い教育活動すべてに笑顔の連鎖、分け隔てなく仲間を思う関わり合いの心が醸成されなければならない。

星槎のバイブル、「ツルセミ・ノート」に、望まれる教師像として二つのポイントを挙げている。一つは、子供たちが自分に何を望んでいるか、またどんな先生を望んでいるのかを子供の立場から考えてみる。もう一つは、教師をしている自分自身を客観的に見ること、見られている自分の姿を把握すること。つまり等身大の鏡で自分を映し、対面にある姿をじっ

くり見つめなおす謙虚さも大切となる。子供たちが望む教師というものを子供たちの側に立って考えてみるのが記されている。教室に入るとまず子供たち一人ひとりの表情を見る。目で伝える授業、目で伝わるメッセージがあることを忘れないこととしている。名誉会長は、子供たちの目の輝きや信頼に値する教師の動き、対応を見られていたようである。また一日一度でもいいから子供たちのことを考え、それを習慣づけること。教育は、心で接するものであるからという。とかく学校という現場は、画一的・均等化された一定のマニュアルをつくり、そのルールに乗せて進ませがちになってしまう。確かにマニュアル化するべきところはそうすべきであり、誰がやっても同様なことができやすい。管理能力の向上や時間の効率化にもなる。しかし、人間対人間になると、機械的に進めることは、かえって負の結果をもたらすことも多い。星槎の教員は、個を認め補完しながら生きる関わり合いの学校としての信頼や人間味により、子供たちが自己肯定感を高め、意識の広がりを自ら創りあげ、変容を図る支援や指導を責任ある形で、実践する立場にあるとお話しされていた。

感謝をこめて

星槎に出会い、「星槎は一つ」、星槎人として多くの仲間や知り合いを得たことに感謝している。著名な方との交流もあった。教職員は、同じ釜の飯を食う仲間、同志的結束を持ちつつ、私にとって大きな財産としてお付き合いさせていただいている。

名誉会長の生き方に、人としての何気ない「しぐさ」中に、心配りや優しさの還流を求めているような気がする。会議などで出会うとき、「よく来たね」と慌てて裸足で手荷物を運んでいただいたこともある。エレベーターでは、常に出入り口の操作ボタン側に位置取りされていた。カラオケ一曲でも、終わりまできちんと聞いてから席を立つタイプの方である。また食へのこだわりや食を通じてのさまざまな交流・エピソードも数多い。いろいろな気質を持ち合わせながらも、星槎に集う人々が人間としてどう優しく生きるか、名誉会長自らの行動が、私たちへの快い刺激となっていた。

星は未曾有で、無限の可能性とロマンを象徴している。校長職であった平成21年度卒業式後、「卒業を祝う会」の席上、福井学習センター卒業生保護者スピーチにこのような言葉があった。「星槎の歌」を聴くと鳥肌が立つような感情が湧き、感動そのものになると話しておられた。「集う我等の学び舎は 友と育む源の……」「共に星に学び人を知り……」、とにかくご自身の生き方や子育てに通じるものが、歌詞や旋律とともに心に響いてくること。あらためて感動の共有、星槎の心を伝えていただいた気がした。

宮澤名誉会長は、多くの仲間づくりから人や人々への想いを伝えている。ご自身、自分は、畑を耕すだけの人間かも知れない。或いは種をまくだけの人間かも知れない。しかし、その積み重ねによって、やがて星槎教育に花を咲かせ、大きな実を实らせる人々が、必ず存在すると信じていただろう。

謹んで、ご冥福をお祈りいたします。